



阿久根 賢一



四代目
桂春團治 師匠



忘れる、できなくなるのはダメなことではなく、 人間が人生をまっとうしているプロセスのひとつ。(阿久根)

- 春團治** 今日のお話のなかで僕が嬉しく思ったのは、徘徊する人に対して妙な指導をしたり、否定をしないということ。歩いている人を否定しないのは、誠に結構なことです。
- 阿久根** 眉間にシワを寄せて険しい顔で歩いたり、明らかに身体や生命に支障があるようであれば、止める様にしています。
- 春團治** もちろん、もちろん。
- 阿久根** しかし、ニコニコして歩いておられたら、どうやったら歩き続けてもらえるかを支援することも、認知症ケアの重要なポイントだと思うんです。でも専門職は、徘徊行動は問題だから止めないといけない。そういうところから、入っていくんです。
- 春團治** あー、なるほど。
- 阿久根** ご自身には意味があって歩いているのに、止められたら否定の連続になる。それが、ストレスになってしまうんですね。
- 春團治** 歩いているのを止めようとする人は、相手方の気持ちには立っていない。ただ自分の心でそうしているから、止めたりするんでしょうね。己の形が大事で、己の気持ちで動いている。
- 阿久根** そうなんです。悪意があって止めているならまだしも、止めている側の介護士たちは、良かれと思って止めている。徘徊は止めてあげないといけない、これは苦痛だと思い込んで止めてしまう。実はそうではない人も多くいる。そういったことを、この本のなかで表したつもりです。
- 春團治** それは、誠に結構なことです。とにかく、世話をする側の人の我が立ってはいけません。
- 阿久根** ケアは、相手があって成り立っていくんです。
- 春團治** そうですね。繰り返しになりますが我々、嘶家もお客様があってこそ。お客様が笑ってくれるかが、大事なことです。
- 阿久根** 我々も、お客様の笑顔があるから、ケアが成立します。まさにそれは、嘶家さんとも共通すると思います。師匠は今後も、高齢者の方へ笑いを届けたい思いはありますか。
- 春團治** それは、もちろんですよ。僕は直接、お年寄りの介護ができるわけではありません。中途半端に参加したら、ややこしいだけやと思うんですよ。僕はお年寄りの方に笑いを届けると同時に、今後もフェローの方々とお付き合いをして、なにかプラスになることを見出せたらいいなと思います。
- 阿久根** 今日は師匠から「否定しない」、「ボケるのは怖いことではない」といった重要なキーワードをいただきました。
- 春團治** そういったことを豊泉家の皆さんから、我々年寄りに言い聞かせてほしいね。
- 阿久根** ボケるのは怖いことではありませんし、忘れる、出来なくなるのは、決してダメなことではなく、人間が人生をまっとうしているプロセスのひとつ。そういう捉え方もできると思います。すべてを肯定することから、始まっていくんじゃないかと思えますね。
- 春團治** 言葉では簡単に言いますが、人様の世話をするという事は、大変だと思いますわ。甘ったるい言葉になるかもしれませんが、フェローの方々には自分のしていることに誇りを持って、生き甲斐として取り組んでもらいたいと、勝手ながら願います。
- 阿久根** 一生懸命にケアをしても、苦しんでいる介護スタッフの方、在宅で介護されているご家族の方がいらっしゃいます。そういった認知症の方をサポートされている方々が、この本を通じて「完璧じゃなくて、いいんだ。ちょっと力を抜いて、やってもいいんだな」などということに、気付いてもらえたらと思っています。認知症の方のそばにいて、特に真面目に、真摯に向き合っている方々にこの本を読んでもらったら、なにかを感じ取っていただけるんじゃないかなと思っています。
- 春團治** 僕から言えるのは、フェローの方々の情愛にひたすら感謝すると、それしかありませんね。本当に、ありがたいことだと思います。僕も今日のお話のなかで認識したことですが、真心というフェローの皆さんとの共通項をこれからも大事にしたいと思っています。

阿久根 ありがたいことに、師匠からは豊泉家のフェローに対して、よくお褒めの言葉をいただきます。

春團治 フェローの方々と接して、会話をしていると、心が洗われる気がするんです。豊泉家でフェローの皆さんに会うと、清濁併せ呑むと言いますが、そのなかで清流だけを飲むという、そんな気がして新鮮なんですね。フェローの皆さんと会うのが、とても心地よいんです。

阿久根 師匠からご覧になられて、豊泉家のフェローはいかがですか。

春團治 1つのことに地道に、一生懸命に取り組んでおられる。それを、身近に感じています。ただ困るのは、皆さん真面目すぎて、冗談が通じないんですよ（笑）。僕は冗談で言うてるのに、真面目にお聞きになられる。でも、そういう人でないといけないんでしょうな。チャラチャラした人間には、務まる仕事ではないでしょうから。地道な努力をされている方にしか、出来ない仕事でしょう。逆に言えば、そこが私の苦勞するところというか（苦笑）。といっても、皆さん陰気なわけではないんです。汚れを知らないというか、清い人たちばかりやからね。そういう人たちにとって、冗談は必要やないんでしょう（笑）。

阿久根 師匠、心のなかでは、ちゃんと笑っていますよ（笑）。

春團治 僕の話をしっかり聞いてくれているのは、わかっています（笑）。他のことを考えていたり、居眠りするとか。そんなことはないですからね。

阿久根 そういう意味では手前味噌ですが、私どものフェローは、純粋な人間が多いのかもしれない。

春團治 そうでしょうな。それと言えるのは、笑いちゅうのはやっぱり、ドロドロした世界にこそ必要。それは古今東西に共通して、言えることかもしれないですよ。笑いの形のひとつとして、体制や権力に刃向かって、それを笑いに転じさせるというやり方があります。

阿久根 風刺的な笑いも、笑いの形ですよ。

春團治 だけど豊泉家のフェローの皆さんに、それは必要でないですよ。僕は豊泉家に異質なものが紛れ込んでいると、自分で思っています（笑）。僕はそのフェローさんの雰囲気嫌いではないので、皆さんと接することは大変嬉しいことなんです。

